

FCT 第11回メディア・リテラシー研修セミナー開催される ークリティカルな分析活動からクリエイティブな制作へー

2008年8月9日から10日の2日間にわたって、FCT第11回メディア・リテラシー研修セミナーを開催した。会場は共催者である神奈川県立かながわ女性センターを利用し、今回も江ノ島の自然を満喫しつつ2日間を過ごした。

研修セミナーは、2日間で9セッションを設けてメディア・リテラシーを理論にもとづいて体系的に学ぶものである。今年は、首都圏を中心に、岡山県、滋賀県、大阪府、京都府、静岡県などから27名が参加した。参加者の所属は大学・高校・中学教員、留学生を含む大学院生、NPO関係者、医療関係者、ジャーナリスト、特別参加の中学生など年齢やバックグラウンドともに多彩な参加者であった。今回のセミナーの特徴は、FCTがこれまで積み上げてきたクリティカルな分析活動ーすなわちメディア社会を深く見つめるアップデートなメディア分析活動ーを発展させて、制作活動を取り入れたことである。

セッションの概要を紹介すると、初日はメディア・リテラシーについての導入的な講義を皮切りに、テレビニュース（洞爺湖サミット）、テレビCM（オリンピック関連）、テレビドラマ（「ラストフレンズ」）などの分析活動と話し合いを行いながらメディア・リテラシーの基本概念について理解を深めた。また、初日には高槻メディア・リテラシープロジェクトの報告も行った。

2日目には、分析活動から制作活動へとつなぐ目的で、カナダのメディア・リテラシー教材「スキヤニング・テレビジョン」から「人種差別をやめよう！PSA」の分析を通して、社会的なメッセージをどのようにして映像として構成するのかを検討した。そして、参加者がいま社会に対して何を発言したいのかについて話しあい、問題意識を共有する数人がグループになって1分程度のビデオ作品の制作を行った。結果として3つのグループが作品を制作した。作品の内容であるが、一つめは2日間のクリティカルな分析活動にもとづいて発見した主流メディアのジェンダー観の歪みや欠落した観点について、二つめは、江ノ島で自分たちが学んでいる意味について、三つめの作品は日常の社会生活で競争や忙しさに追われていることに対して疑問を提示するものであった。

制作活動はわずか2時間半程度であり、ビデオカメラを使って編集なしに作品を仕上げた。とはいえ、制作自体が目的ではなく、制作活動を通して自分たちの意見

をメディア作品によって表現するというセッションの目的は十分に果たすことができたと考えられる。また、続くセッションでは、制作した作品を全体で共有し、相互に分析活動を行い、クリティカルな分析活動を踏まえて制作を行うことの意味を再確認した。

今回、制作活動を取り入れたことについて参加者の感想はどうだったのだろうか。たとえば、「映像制作はこれから必ず取り入れたいセッション」「メディアをクリティカルに吟味するのに、制作の体験は本当に役に立ったと思います。メディアを専門的に学んでいるわけでも、なりわいとしているわけでもない自分がのびのびと参加できるこの雰囲気ありがたいです」「メディア分析、グループ討議、映像制作、どのセッションも参考になりました」「本を読んでいるだけでは分からないライブな経験ができました」という感想からも今回の研修セミナーの組み立てに対する評価を伺うことができる。

また、研修セミナーはリピーターが多いのも特徴だが、今回も4人のリピーターが参加した。リピーターの次のような声からもメディア・リテラシーは1回だけ経験すればよいものではなく、回を重ねるごとに深まっていくような生涯を通しての学びであることが分かる。

「今回、改めて『クリティカルに』の意味をかみしめました。以前に見て分析をしたテキストもありましたが、前にやったから分かっているということはないですね。新しい視点、分析、いろいろなもの見かたがつまっていると思います」

研修セミナーは、鈴木編『新版 Study Guide メディア・リテラシー入門編』を基本に組み立てているが、今回の制作活動は同『ジェンダー編』第8章「私たちのメディアをつくる」に沿って組み立てた。メディア・リテラシーの基本概念 8「クリティカルにメディアを読むことは、創造性を高め、多様な形態でコミュニケーションをつくりだすことにつながる」を参加者とともに具体的な制作活動を通して共有することが出来たといえよう。制作活動を通して、ごく普通の日常を生活している私たちが実は発言したいことをたくさん持っており、そのことをグループの話し合いを通して共同で形にしていく活動は非常に「わくわくする学び」であることを実感することができた。

参加者からの声に学びながら来年度の企画に生かしていきたいと思う。

(ファシリテーター：宮崎寿子、田島知之、登丸あすか、西村寿子、森本洋介)